
アルモニア国物語

宵月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルモニア国物語

【Nコード】

N3002L

【作者名】

宵月

【あらすじ】

親にもかつての知り合いたちにも、すべてに憎まれ蔑まれた少年が願うのは、彼を暗いところから救い出した一人の姫を彼女の言葉どおりに彼女を こと。

『国家から人殺しをゆるされた』少年と姫の物語

序章 悪魔憑き

ユーティリスという蒼く広大な世界には、いくつかの大陸とそれを囲む海が広がっていた。

その幾つかの島や大陸の中で最も広大な大陸、其処に住む人たちはその大陸をイエニスイと呼んだ。

イエニスイに有る強国、アルモニア王国で物語は始まった。

A・O・（アルモニア王国建国）456年、サファイアの十六月
アルモニア王国東端、クルヴィ

「いやー、今日もノルガンディアの連中は攻込んでできませんでしたねー」

「攻込んできて欲しい、という訳ではないのじゃが・・・こう平和が続くと門番など退屈なものだし・・・」

中年の虎型獣人の門番兵が呟くのに上の物見やぐらにいた老年の翼人兵が答えた。

獣人、というのはヒトの亜人といわれる種で、ヒト種よりも発達した筋力と体力、体格などから、ヒトよりも戦闘向きに進化した種で、側頭部から伸びた耳と尻尾が特徴的である。獣人の中にもいくつかの種類があり、耳が猫のようだったり虎のようだったりする。その場合、虎のようななら虎型獣人、猫のようななら猫型獣人、となるのである。

翼人、という種も獣人と似たような種で、側頭部から出る耳と尻尾がなく、代わりに背中から大きな羽が生えており、それで飛ぶことも可能である。

「まあ、というのもこの門のと領主様のおかげなんじゃがな」

老年の警備兵は彼の立つ重厚な門を見て、昔に思いをはせる。

クルヴィは、アルモニアの東に位置するノルガンディアとスイデラス山脈をはさんで接する場所で、ノルガンディア王国との戦線の前線である。今は、アルモニアとノルガンディアの戦争は休戦しているため、今も戦いが続いているというわけではないが、資源豊富で住んでいる種族も多いアルモニア王国は資源の少ないノルガンディアにとってかならずしも征服したい国なのだろう。だからだろう、昔は、アルモニア王国に攻込もうと毎日のようにノルガンディアはクルヴィに兵を送り、大量の戦死者が出ていた。遂にクルヴィの領主がノルガンディアによって殺されてしまったとき、クルヴィはあきらめの霧困気が漂っていた。

それを哀れに思ったアルモニア王、ハーデイス・アンドロマリウスはクルヴィにその状況を打開するだろう男を領主として派遣した。先の大戦で名を上げた猛将、ウーノ・K・ベレンツェ、その人だった。彼は、クルヴィに着くと重厚な門をつくるように指示した。半年以上かかるだろうと思われたその工事は、ウーノの軽い口ぶりや物腰からは想像もつかないほど適切な指示と指揮により、ほんの二三ヶ月で完成することとなる。飛竜でも破壊には数日を要するだろうその門が完成した事により、ノルガンディアはクルヴィに攻込めないと判断したのか、完成してからの数年、ノルガンディアの軍勢がこの門の前に現れることもなくなっていた。

「くそー、ノルガンディアはこねーって言うのにこんな日に門番かよーっ」

「わめくな、若様がお生まれになれば、どうせあやつがクルヴィ中を走り回って知らせるじゃろっよ」

今日は、そのクルヴィに平和をもたらした領主、ウーノの子供が生まれる日なのだ。朝から、クルヴィ中が、そのうわさで持ちきりになっている

「どんな子なんでしょーねー？奥様すっげー綺麗だし、この間生まれだした姫様にも負けないくらい綺麗な女の子だといいなー」

「このペドがつ」

「づあっ！！わざわざ上からもぶつけないでくださいよー！！」

門番は上から降ってきた木材を拾って老年の警備兵をにらんだ。

「ペド発言などしおったのだから当たりまえじゃろう。それに、若様はきつと大剣のよく似合ういかつい男になる子じゃわい」

「きつと可愛い女の子ですよー」

「いいや、立派な戦士たる男のこじやろう」

この、門番と警備兵の言い合いは、両方とも一部はずれ、一部当たることとなる。

領主の館の周りに深い夜の闇が降りた頃、領主の館に産声が響き渡った。

『領主様に元気な男の子が生まれたそつだ。』

その報せはクルヴィが朝を迎える前にはすでに街中に広まっていて、住民たちは領主の吉報に我が事のようによろこんだ。

何故、生まれたのが深夜であるのにも関わらず、朝も迎える前にその報せが町中に届いたかというと、感極まった領主の近衛兵のひとりだけが一人、任から脱走し、バカ騒ぎをしながら町中を走り回ったからだ。

もちろん彼はのちに仲間の手によって捕まり、領主の前に下手人

よろしくしょっぴかれるのだが、子供の生まれたためだ、という事で一週間町中の掃除、という程度の罰ですんだそうだ。

A・O・460年

四つになつた領主の子供は、父親の気質をしつかりと受け継ぎ、自由奔放に暮らしていて、時折、乳母や教育係に追い掛け回されている姿がクルヴィ内で見かけられるようになった。

その顔は、母に似たのか線が細く、知らない者から見れば十分に女の子と間違えられる線の細さだった。だが、その瞳は力強く、気品に満ちた焰色を宿していた。

自由奔放な性格から彼は、どんな子供とも遊ぶようになっていた。初めは、彼を妬むような子供もいたようだが、彼の性格からか少し経つと、そんな子供はいなくなっていた。

「おいおい、若様がまた苛められツ子を連れ出して遊んでるぜ」
「あー、あの子か。まあ、アイツの子だし、悪い子じゃないだろうしな」

町の農民たちの見守る先、そこにはローブを目深にかぶつた子の手を引く領主の子の姿があった。

「ま、若様なら大丈夫だろう」
「きつとつまく他の子たちの中に溶け込ませるだろうよお」

農夫や商店のおばちゃん、巡回兵たちは、その二人の様子を暖かく見守っていた。

だが、その半年後事件は起きた。

「おい！若様がいなくなつたそうだぞ！！！！」

町の詰め所に血相をかえた農夫が飛び込んできた。

「ウチの子もいないんです！」

「なんだつてえ！？」

日が暮れ、次の日、また次の日、さらに次の日．．．と探しても、彼とその仲間たちは見つからず、唯一見つかった者近くの森の木に日かかっていた領主の子がいつも腕に巻いていた黒い紐だけだった。

A・O・462年

二年経っても、町は子供たちのいなくなったことで重苦しい雰囲気漂わせていた。

その空気に耐え切れず、よそへ行く家族も増え、クルヴィは閑散としていた。

かつては若々しかった領主も、この二年で一氣にふけこんでしまった．．．

だが、領主はまだ幽鬼のように町中を歩き回り、子らを探し続けていた。そのときだった、領主の子が帰ってきたのだった。

何かの血や泥にまみれ、ボロボロの布キレのような服をきて、瞳の色までもが変わってしまった。それでも、領主は彼が帰ってきた事に喜び、駆け寄ろうとしたときだった。

彼の額に青白い線で幾何学的な模様が描かれ、そして、彼の背後に黒い影のような魂のようなものが浮かんでいるではないか。領主の足は、それを見た途端、動かなくなった。

幾何学的な模様は影、それはすなわち精霊などの神霊種と相反する存在、悪魔がとり憑いている証拠だった。もう古文書にしか載っていないような、この世に災厄を呼び込むとされる存在、悪魔憑きに領主の子供は成り果ててしまっていた．．．

序章 悪魔憑き(後書き)

初投稿なのでつたない文章ですが、よろしく願いします・w・

第一章 デイリテイリオの森にて

A・O・474年、サファイアの三月

深き夜の闇の降りる中、木が乱雑に生えている森の中で、一つの集団が野営をしていた。

大きい荷台を引く馬車5台に20人ほどの獣人とヒト族が火を囲っていた。

20人のうち3人は腰にシヤムシル曲刀、身体にはレザーメイル革鎧で武装しているガタイの良い男たちで、残りの10数名は男女入り混じった商人たちだった。

このデイリテイリオの森は、西に抜ければ交易都市フリマタにつながり、北に抜ければ神殿都市マディスへと繋がる交通に便利な森なのだが、ここに住む魔物たちはほかの森に住むもの達よりも獰猛で危険な森だ。さらに最近では、盗賊団が出るらしい。

どうやら、このキャラバンは武装した男たちが護衛で後のものは、フリマタへと向かうらしい。

この商人たちは、前の町で傭兵ギルドにでも護衛を頼もうかと思っていたが、料金が高めで迷っていたところ、この男たちがまだ護衛を始めて間もないから、と破格の値段で売り込んできたのだ。

商人たちは迷ったが、経費をできるだけ少なく、利益をできるだけ多く、という商人魂が働き、男たちの売り込みに快く応じた。

ここで、それが命取りとなった。

火を囲って数時間、この数時間何事もなかったためか火の暖かさからか、商人たちに眠気が訪れた頃、男たちは動いた。

まず、護衛の男たちが動き、近くにいた男の商人にその腰の曲刀を振るった。慣れた手つきはよどみなく、そして獣人由来の豪腕で

一瞬にして大の大人の首を切り裂いた。

突然起きたことに商人達は頭がついていかず呆つとそれを眺め、切り落とされたものまでもが首のない自分の体を不思議そうに眺めていた。

「ごぶごぶつと血が傷口からあふれ出したと思った次の瞬間、間欠泉のように血潮が首から飛び散り、周りの商人や、自分の首に血を撒き散らした。

そこで、ようやく商人たちの頭が事態に追いついた。

「う、うわあああああああ！！！！?????」

「きゃーーーー！！！！！！」

商人たちは護衛、と思っていたものが自分たちの命を脅かすものであったことで混乱し、錯乱したところで、周りの木々に隠れていた男たちが飛び出し、男の商人を殺害し、女と捕らえた。

彼らこそが、この森に出る盗賊だったのだ。

盗賊たちの狂乱の宴が始まった・・・

数時間後、護衛だったはずの男たちを含めた20数名の男たちが、火を囲って酒を啣り食糧をむさぼっていた。

商人たちの死体は無残にも脇に押しやられ、積み上げられていた。死体は全て男のもので、女の商人たちは縄で縛られて逃げる事が出来ないようにされていた。彼らの宴の醍醐味に使われるために、男たちの一人、2mを越すだろうかという最も凶体の大きい男、この盗賊団の頭だろう、が酒を啣り言った。

「まあ、たく、守銭奴の商人つうのはどうしてこう、面白いくらいに簡単にだまされてくれるかねえ」

これでもう十回は、同じ手口で商人たちをはめている。情報伝達手段が魔術や狼煙のろしくらいしかないため、獲物を逃がさなければ何度でも同じ手を使えるはずだが、いつ魔術師がくるかわからない、そろそろ潮時だな、と頭が思ったとき、一つの案が浮かんだ。

「おい、そついえは近くの村で龍が出たからってガラガラになったところがあったよな？」

「へい、ちよいと遠いですがいけねえ距離ではありやせん」

「よしつ、お前ら次の仕事は強盗だー」

補佐的役目の奴がそついうのを聞いて、頭は勇んで立ち上がり仲間たち全員に聞こえるように宣言した。そして、視線をつつと捕まえた獲物たちに向ける。

「その前に、女でも抱いてくかあ」

「へへへ・・・」

「ひッ！」

頭とその仲間が下劣な笑みを浮かべながらよってくるのを見て、女商人たちは恐怖に顔を引きつらせた。

「い、イヤッ！ー！」

「へへへ・・・そつは言ってもしばらくしたら、自分から腰を振ることになるんだぜエ？」

そう言つて、頭が怯えきつた女商人に両腕を伸ばしたときだった。何か黒いものがサツと頭の目の前をすり抜けたと思った次の瞬間、ポトンツポトンツと二回、ゴムボールが地面に落ちるような音がした。

「あ？」

頭が下を見ると、地面に落ちているのは誰かの腕。見覚えのある、太めの腕。

そして、腕の付け根から脳髄へと上ってくる熱のような痛み。

突然の出来事にさつき自分たちで殺した商人たち同様、脳が事態を把握しきれていなかったが、痛覚が追いつき自分の腕を見たとき、盗賊たちの頭の絶叫がほとばしった。

「アアアああああああああああ！！！！！！腕っ、俺の腕があああああ！！！！！！」

頭は先のない二の腕を振り回し、暴れる。切断面からは血が噴出し、先ほど盗賊たちに殺された商人たちの血で染まっていた地面をさらにそめあげる事となった。

彼を見たものが初めに抱く印象はその瞳の焰色と全身を覆う黒だろっ。

深夜の森の中の闇よりも一段濃い黒のロングコートに黒色の軽くはねた髪、背に二つ背負う黒い鞆、そして、顔の上面を覆う黒の仮面。黒で統一された中、仮面の奥で輝く焰色が見るものを凍りつかせた。

頭よりも二周り以上小さい少年は、その両手に一本ずつ持った大剣で暴れる頭の腹部を打突し、気絶させた。ロングコートを着ているせいで分かりづらいが、少年は線の細い体をしていることがわかった。そんな、細腕の何処に大剣を両手に一本ずつ持つ腕力があるというのだろうか。

少年は白く輝く大剣と刀身までもが黒い大剣の両方を構えると言った。

「デイリテイリオの森に出る盗賊団、お前らおとなしく殺されるか、逃げ出して無残に殺されるか選べ」

「へっへっなんだテメー、テメーみてーなガキはさっさと家に帰ってクソして寝やがれ」

頭が殺されたことで啞然としていた盗賊たちだが、少年の一步でも動けば斬る、という重苦しい殺気が張り巡らされる中でも動く、勇気のある一人の男が少年に近寄り身長の差を示すように見下ろして言った。

この盗賊たちはみな180の身長を持つ巨漢ばかりで、小柄で160ちよつとしかないだろう少年に、その脅しは効くかと思われたが。

「初めはお前か」

「あ？・・・がふっ」

少年が言った瞬間、ドンツと鈍い音がし、男の身体を深々と黒い大剣が貫き、その刃先を他の盗賊達に見せ付けていた。

男はその一撃で心臓を貫かれたのか、ガクンと動かなくなった。

「あははっ殺しやがったぞ！こいつ！」

盗賊の一人が、狂ったように言うつとさらに続けた。

「いいかあ？ボウズ、どこから依頼されたかしんねえけど、どんな依頼を受けてても人殺したら、テメーも犯罪者なんだよ？わかったか？この犯罪者が！！！」

自分のことは棚にあげて男は言うが、少年は仮面のせいで分かりづらいが涼しい顔をしていった。

「それがどうした」

「あ？」

「お、おい・・・待てよ、そいつ・・・」

「あんだよ？」

盗賊の一人が、少年に掴みかかっていた男に何かに怯え、震えながら言った。

「黒のロングコートに黒い仮面。両手に持った白黒の大剣・・・

そ、そいつ、刃撃滅者のアガトだ!!!」

「げ、撃滅者あ!?!?・・・てなんだ？」

「国家から特別に『人殺しが許されてる』やつらだよ!!!!!!」

「はあ!?!?」

「・・・うざ」

わけわかんねえというかのように盗賊が仲間に向かって顔を歪ませた瞬間、アガトと呼ばれた少年は呟き、その剣を振った。

「があ!・・・あああああああ・・・」

「ひっひいい!!!!!!」

捕らえられていた女商人が助けられたにも関わらず怯えるほど、むごたらしくアガトは目の前の突っかかってきた男の肩から下に掛けてを切り裂いた。あまりの激痛に倒れた男は、ろくに動くこともショックで呼吸することも出来ず、ヒュー、ヒューっと喉笛を鳴らした。

少年は、何事もなかったかの様に脇に詰まれた商人の男たちの死体を見て呟いた。

「Fierg:vea:rrou:fi:e:to:/」

「？」

よく分からない言語を使い始めたアガトは、それに続けていった。

「Saahmn:teahgr:deeaecsd:/」

何かの詠唱を終えた途端、アガトの周りに青白い灯りが十数個灯り、そしてアガトの背後に大きな黒い魂のような影のようなものが現れ、アガトの瞳の色も染み出すかのように色が変わり、黒くなつた。

ひいつと言いながら盗賊達は慌てて逃げ出し始めるが、アガトは動かず、逃げた男たちを指差し、

「lod:/」

呟いた瞬間、木の幹から、根から、地面から、草から、いくつもの血にまみれた手が伸び、逃げようとする盗賊達の足や手を掴み逃亡を防いだ。

「なんだコレ！？なんだコレエエエエ！！！！！？？？？？」

「死霊術……」

血でぬめる手で捕まえられ、男たちはパニックを起こしなんとか引っぺがそうと地面を転げまわるが、異常なほど力のこもったその腕は放すどころか、はがそうとすれはするほど、こもった力が増え、男たちの足を圧迫する。それを見ていた女商人の一人が信じられないう、という顔をしてアガトを見た。だが、アガトはそれに目もくれず

「一人逃がしたか……」

木立の中に消えていこうとする男の一人を追いかけ始めた。

「はあっ、はあっ・・・っ。くそうなんだって刃撃滅者なんてくんだよっ」

一人、『手』から逃げおおせた男は必死に逃げ、息も絶え絶えになりながらばやいた。

夜の視界の悪い森の中、転ぶものなどいくつでもある。男は何度も木の根に引つかかり、くぼみに足をつっこみ、なんども転がり倒れても起き上がり、転がっているのか、走っているのか、はいずっているのかも分からなくなってしまっただけで必死に逃げていた。

刃撃滅者になんて勝てるわけねーだろっ！と心中で思いながら男は逃げていた。ただ、あの虚ろな深淵と擲掬される少年から逃げるためだけに。

だが、遂にそれも終わりになってしまった。

何度目かのくぼみで、遂に男は足をくじいてしまったのだ。動けなくなり、男は苛立ちをぶつけるように地面を拳で思いつきり殴る。

「くっそお！！！！なんで俺が！こんな目にあわなきゃいけないんだ！！！！」

「お前も盗賊の一味だからだ」

ひいっと声のした方に反射的に振り向いてみれば、そこには涼しい顔をして、息一つ乱していないアガトが男を見下ろしていた。

男は獣人の俺で肩で息をしているというのに、こいつはヒトのく

せにどんな体をしてるんだつとよけい空恐ろしくなった。

「お、俺はまだ誰も殺してないんだ！この間入ったばっかでもまだ誰も切ったこともないんだ！」

「そうか」

「だ、だから！見逃してくれよ！なあ！」

アガトが理解を示したと思い、男は必死に命乞いをするが、次の瞬間、ズドンツとアガトの背にあつたはずの大剣の一本が、男の獣人特有の短い鼻から数センチも離れていないところに突き立てられ、男はそれを見てすくみあがつた。

アガトは、その焰色にもどつた瞳をぎらぎらと輝かせ、男に言った。

「それでも、俺はお前を斬る。俺は撃滅者、『自分の正義』を貫いていくために」

「あ……ああ……」

アガトの殺気に当てられ、男はガクンツと意識を失った。

「……ちっ、気絶しやがったか……」

『苛めすぎだからな、単なる盗賊程度に。あー、哀れな盗賊』

「五月蠅い」

アガトは、突然聞こえてきた声にさっきまでの殺気を込めず、友達とふざけているかのような声で言った。

『殺す気なんてねーのに殺気バシバシ出して、それがイジメ以外なんなんだよー』

「……」

アガトは、その男だったら高め、女だったらハスキーと扱われるような中性的な声に仮面の位置を治して聞こえないフリをした。

『さっきのお頭だつて気づかれないうちに死なない程度に止血してるしさ、さっきの男は肩口斬つて派手に出血させてるけど痛みと見た目がすごいだけで命に別状ねーしさ、腹貫いたのだから器用に内臓避けたから早めに医者に連れてけば問題なくてさー。それでこっただけやるってイジメだろー』

「あー、うるせーうるせー」

アガトは頭に響いてくる声に無駄だと分かっているも片手で耳を押さえ、片手でトランクか何かを持つかのように気絶した男の足を掴み、引きずりはじめた。

アガトの黒い姿は時折、何かの木々にぶつかる鈍い音をさせながら、森の中に消えていった。

第二章 交易都市フリマタ

アルモニア王国の北部に位置するフリマタという町は、そのまま北上すれば豊富な海産物の取れる港街プサリ、10日程南下し続ければ王都ペプロメノ、西に行けば、アルモニア王国最高度の山、イエネオドロスの山のある農村フィット、東には国境、クルヴィの街という交通の要所だ。

港と農村、さらには王都へとつながる交通の要所のこの町は、同時に交易最大の町だった。

一人の幼い少女が、うずくまり泣いている子供を見ている。

幼い子が泣いているというのに町の間人は近づかない。

まるでその子供に怯え、警戒しているような目で見て。

しかし、彼女は、その子供に聞いた。

「私は 。 貴方の名前は何？」

子供は、その声に怯えたのが驚いたのかよくわからない表情をして顔をあげた。

そこには、額になにかの痣がある線の細い顔があった。

少年の目がゆっくりと開く。

目に映るものは、見慣れた木製の天井で、先ほどまで見ていたものは夢だと少年に伝えていた。

フリマタの住宅街の一角。そこにアガトの住むアパートはあった。木造二階建てのこのアパートはアガトのよく通う、傭兵の仕事幹旋

所ギルド《アトラス》からほど近いところにあるため重宝している。

『起きたか、アガト』

姿の見えない何かの声のアガトの耳に聞こえるのでは無く、頭に響くという形で男とも女とも取れない中性的な言葉使いと声が聞こえた。

目をちゃんと開くと、細部は真っ黒でよく分からないが、手のような部分や足のような部分がある、人型の影の塊が空中で胡坐をかのように座っていた。

他人には、ただの影にしか見えないのだが、憑かれたものだからか、アガトにはそう見える。

「ああ、おはよう。アゼル」

『早く起きろー。じゃないと、もっとちゃんとした姿になれないだろー』

「ああ、悪い」

アガトが呆つとしてしていると、目の前の影の塊の細部がどんどんと細かく描写されるように見えていく。

アゼル、とよばれた影は、細かいところがちゃんと見えるようになる、クルンツとその場で回った。

『やっぱりこっちの方がいいな』

「他のやつらに見えないんだから意味ないだろ」

アガトに良く似た、白い肌に、夜の闇よりも一段濃い黒の艶やかに光る髪、細く伸びた四肢。服は黒尽くめのアガトにあわせているのか、はたまたアガトがあわせているのか、四枚の黒い布を重ね合わせたような特殊な黒服を着た15、6歳の少女だ。美少女という

言葉が当てはまりそうだ。

目の前に現れた少女は人間のような容姿をしているが、アガトにとり憑いている悪魔、のはずだ。言動があまりにも人間臭いため、微妙に自信がなくなってしまうたが・・・

『さつさと準備してギルドの方に行く。昨日の仕事の残務処理終わってないし、ミアスが呼んでた』

「わかったから、すこししずかにしてる」

口づるさい相棒に毒づきながら、まだ少し寝ぼけているのかふらふらとすっかりとしない足取りでアガトは洗面所へと向かった。

もう春ではあるが、北部であるためまだまだ冷たい水を頭にかぶりアガトは眠気を払う。適当に顔を洗ったり歯を磨いくと一息ついた。そして、脇においてあった仮面を手取る。

真っ黒で禍々しい仮面が額から鼻までを覆い、それが横に伸び、後ろで留める。

アガトは、洗面所から出ると机の上に放り出していた薄いつくりの鎧を胴に留め、その上に黒いロングコートバスタードソードを着て隠す。

脇に立てかけてあった漆黒と純白の二本の大剣を背負う。

「行くか、ミアスがここまで呼びに来ないうちにな」

『もう遅いと思うけどねー』

丁度、アゼルがそういつた時だった。外の共同階段を荒々しく上ってくる大きな音が響いてきた。

「・・・はあ・・・」

アガトが疲れたため息をつくとき、部屋の扉が荒々しく開かれた。

「アガトー 迎えに来たよー!」

荒々しく開いた本人、ミアスは何処か西欧人のような細い顔つきに、光を反射する水色の長い髪をもった綺麗な少女だった。そしてその頭の上に髪と同じ色の水色の尖った耳が付いていた。彼女は、アガトのような武装ではなく、そこらへんの普通の少女の格好をしてはいるが、彼女も立派な傭兵。中でも、高位に位置する魔術と得意とする傭兵、魔剣騎士で、“ヘルファイア劫火”という通り名で通っている。

「ミアス、何時も言うようにもう少し静かに来てくれないか？」

「てへっ、ごめん」

ミアスは舌を少し出し、片手で謝る。ミアスの可愛い容貌をもってこういうことをすれば大半の男は許してしまうだろうが、アガトはそういう男たちの部類には入っていないかった。入っていないかったというよりも、ミアスに慣れすぎて異性としてあまり意識しなくなっている、といった方が正しいのだが。

「そういつも言うんだが、実践されたためしがないぞ」

「もー、わかったよお」

耳を垂らし小さくなってミアスは言った。だが、すぐに耳をピンと張り、明るい顔になってアガトに言った。

「じゃあ、アガト!急いでギルドの方にいこう!今日は大きな魔物狩りをするってマスターが言ってたよ!」

「ふうん?わかった」

気付くとアゼルは居なくなっていたが、ミアスにアガトが悪魔憑きであることは教えていないのでどこかに隠れて居るのだろう。

「ほぐら！さつさと行くよ！」

「お、おい！あぶな！危ないから！！」

「大丈夫大丈夫！って、はわっ！」

「ぎゃーーーー！！！！！！」

ミアスはアガトの手を引っつかみ、ばたばたとミアスは部屋から連れ出して行った。アガトはそれに対し、昨日自分が盗賊の一人にやったことを棚上げし、ミアスに文句を言っていた。

『・・・騒がしいこ娘だな』

どこかに隠れていたアゼルが一人、ぼそっとつぶやいてから床に沈みこむようにその黒い影を消した。

街にでると朝だというのに、ヒト族やささまざまな獣人たちが大通りを埋め尽くすほど歩いていた。獣人族以外はあまり見ないが、亜人の中でも獣人は数が多いため、ヒト族と入り混じって街中で暮らしているだけで、町の外、森の中や湖の近くにいけば、他の亜人たちも結構見る。

人や獣人の入り混じった人通りの多い大きな通りを抜けると大きな木造の建物が現れた。

アガトやミレスのような傭兵達の仕事斡旋組合、ギルド傭兵組織《アトラス》フリマタ支店だ。

ミレスはアガトを半場引きずったような格好のままギルドに飛び込む。

いままで仮面の黒服少年を引きずった獣人の少女と周りから浮いていたが、ギルドに入った途端、そんな空気は霧散し、浮かなくなつた。薄暗いギルドの中、周りには直結している酒場で酒を飲んで

いるフルフェイス兜をかぶった男たちやすね脛に傷のありそうな男たち、たまにだが、ミアスやアガトと同年代の少年などもいるが、あまりにも強面の男たちが大勢いるためか、空気が違う。このエンランスで既に町の空気とここは異質であるのだ、と告げているのだ。

ミアスはそんな周りを気にせず、カウンターの若い金髪で獣人の女性に話しかける。

「マスター、アガトつれてきたよ」

「ああ、ありがとねー、ミアス。コイツ、ミアス以外には家を教えないもんだからなあ。そんなに彼女以外に起こされるのはイヤかねえ？」

「そんなカノジヨなんてえー、もつと言ってくださいっ」

「そんなんじゃないです」

同時に真逆のことをミアスは恥かしそうに身をよじりながら、アガトは平然と言った。

この男勝りな女性はセクメト。ミアスのような獣人で、若い身なりでは有るが、大斧騎士としての腕は他を凌ぐものもち、26にして既にギルドマスターを任されている。

「お前らはいつもそんなんで・・・まあ、仲がいいって証拠かな？」

「・・・」

「わかってるよ、昨日の仕事のことだろ？そんなに睨むな」

アガトの無言の抗議に、セクメトはクククツと笑いながら応えた。この女性は、仕事は速いのだが、間にこいうフザケを入れるため、結局普通の速さと変わらなくなってしまふのだ。

「えーとつ、デイリテイリオの森の盗賊の捕縛、または討伐依頼、
だったな。頭の両腕は切り落としまつてたが、的確な止血があり
命に別状は無く、その他にも一見重傷を負ったように見えるものも
いるが、全て命に別状がないよう応急処置、または手加減されてい
た、って報告が来てるね。まあ、誰も殺さなかつたって事で依頼人
からポーナスが着てるよ。受けとりな」

セクメトが手を出し、カウンターの上にドサツと重そうな皮袋が
置かれる。

「まあ、あんたにははした金だね。で、こつからが本題、次に頼
む仕事についてさ」

セクメトはその瞳を妖しく輝かせた。

第二章 交易都市フリマタ（後書き）

主要登場人物を小出しに出している状態ですねー・・・
宵月としては、全部でちゃってからが一番書きやすいのですが、主要人物の一人がもつとずっと後にならないと出てこない予定・・・
書きたくてもバランスを壊したくない（もう壊れてるかもしれない）
んがw）けどさっさと出したいっ、と苦悩しております・w・

第三章 不運の影

「今回はあんたら二人でもちよいとめんどくさいかもねえ」

「え」

アガトはすこし冷や汗を流す。アガトもミアスもフリマタ支部では一番の実績を持っている。そんな二人組みでもめんどくさいと言うのはどれほどの依頼なのだろうか・・・

「で、イルヴィアに手伝ってもらおう事にした」

いつの間にか、セクメトの横に長い緑髪の女性が立っていた。歳はアガトよりも少し上くらいだろうか。

聖女のようにニコニコと優雅に微笑んでいる彼女は、イルヴィア。その優雅な物腰は、ミアス同様にここに似合わないが、彼女も立派な短剣騎士ナイフナイトでそこらの男など簡単に伸ばしてしまうだろう。

蒼髪の獣人の美少女、緑髪の優雅な女性と癖毛のところどころはねている黒髪に顔の上半分を覆う黒い仮面をした少年。

前半二人だけでいれば、美人二人組みとして取り巻きが出来そうだが・・・このような変な格好の者が一緒にいたら、一瞬で不審がられるだろう。

「こんにちは」

「ども」

「あれ？イルヴィアさんも一緒の依頼ですか？」

「ああ、今回はこの三人以外うちのむさい男供にはまかせられないからねえ」

丁度そのときだった。酒を飲んでいた男達の方から小声で話す声

が聞こえてきた。

「おい、あそこにいるの狂乱と劫火クレイジーハッピサファイアに深淵アビスじゃないか？」

「なんだ、あんながき餓鬼どもなのか」

「おまつ、馬鹿やろう。俺、あの真ん中の獣人の戦いを見たことあんだけど、あんなの人ができるもんなのかって思うくらいだったんだぞ？」

「……」

その自分の犯した罪の証たる通り名に、ミアスは暗い顔をして俯く。耳の垂れ、寂しそうなその頭にアガトは手を置いた。

「気にするな ただ今を見る」

「……うん、ありがと」

「おい、そこのおふたりさーん。勝手にいい雰囲気になってんじゃないよ」

「いい雰囲気になんてなってないですよ……イルヴィアさんも来たんで、依頼について話してくれませんか？」

「しょうがないねえ。とりあえず、あんたら三人はアタシを抜いてウチの最強三人だ。その三人を集めるくらいだからものすごい危険な以来だっことは分かってるだろう？」

「まあ……」

三人ともが小さくうなづく。

気付いた、というよりも、アガトはミアスに大きな魔物狩りをすると聞いていたので危険なことは承知済みだ。

「あんたらにはここから東にある邪鬼オーガの巣に行ってもらおう」

「へ？」

ミアスが変な声を出す。
オーガの巣を狩るなど、そこらの男たち十人ほどかき集めれば出来る。

もっと危険な魔獣中最強種、龍の巢穴ドラゴン狩りなどを覚悟していたのかミアスは肩透かしを食らっている。

「まあ、これだけじゃミアスの反応が普通だろうね」
「まるで、もっと悪いことが重なってるような口ぶりですね」

イルヴィアが微笑みを絶やさずに言った。
三人ともそんな事は分かっているが、確認することがこれまでの死線を超えるような戦闘を続けてきた日々で三人とも身体に染み付いている。

「そうだね、最悪だよ。」
「？」

セクメトは、こんな仕事であるにもかかわらず基本的に楽観的で、無謀といえるような依頼もひょいと傭兵たちに渡すことがある。

・・・それで何人の傭兵が死んだことか・・・
そんなセクメトがここまで言うほどだ。どれほどのことが待ち受けているのか、恐ろしいなどとは露にも思わず、何処か愉しんでいる狂気が、悪寒のように背中に走る。

「何が起こってるんですか？」
「オーガってさ、馬鹿でしょ？」
「うん」「はい」「そうですね」

セクメトの問いに三人が同じ意見を述べる。

オーガはその姿は鬼だが、他の鬼族よりもはるかに知能が低く馬鹿の代名詞、豚の亜人、オークとたいした差はない。

「だからね？たまたま子供しかいなかったんだろーな」

「わかるように言ってください」

セクメトが遠い目をするのに、いい加減アガトは話を催促する。

「オーガの馬鹿がね？ドラゴンの巣穴を突っついて、子供をほとんど殺して逃げたんだって」

「な・・・」

『ヒュー。やるう、オーガ』

最悪だ。依頼のときは、何時も興味なさそうに黙ってるアゼルが出てくるほどにだ。

ドラゴンは子に興味がない魔物の中でも珍しく子供を大切にしている。だからこそ、時に神獣とも扱われるのだろうが、子供が攻撃されただけで、その種族の巣の一つを何匹も出て行ってつぶすほどだ。子供が殺されたとあつては、それよりも酷いことだ。

かつて何処かの国がドラゴンの子を何体も虐殺し、怒った龍に滅ぼされたという昔話があるほど、彼らの子供への執着は半端ではない。

「まあ、オーガに抗えるほどの知恵も力もなくて、簡単に皆殺されちゃったけど、それだけじゃ怒りが収まなくて、ものすごい暴れてるらしいんだよ。ね、危険だろ？」

「そうですね。危険すぎて逃げたくまりましたので帰ります」

『やらないのか？楽しそうだぞ？』

「え〜？アガトやんないの？やるうよあ〜」

アガトが相棒の声も無視し、スタスタと逃げよつとするとその裾をミアスが掴む。

アガトはため息をつき、ミアスに抜き直るとその肩をつかんでいった。

「今度、休みに一日中買物に付き合っただけから見逃せ」

「うんっ。わかった!」

「はやっ!ミアス!もつと引き止めたり条件を引き上げたりしてくれよっ。」

アガトに脅威の速さで籠絡かごらくされたミアスにセクメトは突っ込む。

「けど」

一人、そのやり取りを眺めていたイルヴィアが微笑みを絶やさずに言う。

その天使のような微笑に何処か、薄ら寒いものを感じて、アガトは無意識に背に背負っている剣へと手が伸びる。

「そうだったら私とミアスさんだけでドラゴンと大量戦闘ですから、私、自分が抑えられなくなってしまうかもしれません」

「ぜひ、やらせていただきます」

アガトは一瞬で、もとの位置に戻り、死んだ目をしながら淡々と言った。

この人のリミッターが外れた戦いがあるくらいならそれ位する・
・この人のアレは嫌だ・・とアガトは内心、泣きながら思った。
ニヤリッとセクメトは意地の悪い笑いをし、

「じゃあ、エッジ・エクスキューター 刃撃滅者 アガト・フローズヴィトニル

マジックナイト
魔騎士 ミアス・バステト

ナイフナイト
短剣騎士 イルヴィア・アリアンロッド

この依頼をあなたたちに任せるよ」

『イルヴィアはなあ……てか、セクメトも明らかにこれ狙って
たよね……』

ミアスはもちろん、アゼルさえもが、アガトのその行動に同情し
た。

第三章 不運の影（後書き）

前の更新から結構経っちゃいました。すみません・w・;; ;
テストが終わったばっかで頭がぐしゃってる状態で書いたので誤
字脱字多いかもです ;w ;

第四章 龍族討伐依頼 開始

「では、明日よろしくお願いしますね？」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「よろしくねっ」

数時間の打ち合わせを終え、三人はギルドの外にいた。

件のオーガの巢へは、明日出発するとなり、三人とも今日は準備と休息に当てられた。これから三人でどこかにいこうか、とミアスは言っていたが、イルヴィアは用があるのか直ぐに別れを告げて分かれた。

既に昼を回っており、朝よりも大通りは人手が多く、直ぐにイルヴィアの姿は見えなくなった。

ミアスはこれから買出しと言っていたが、別にアガトは消耗品を前の依頼が終わってすぐに補充したので、特に用事はない。帰って寝ようかと考えていると、横からおどおどとミアスが声を掛けてきた。

「ねー、アガト」

「なに？」

「ひまならさ、ちよつと付き合ってよ」

「ん・・・まあ、良いぞ」

「やったっ。じゃあ、直ぐに行こう」

「何処につれてくんだよ」

「ついてくればわかるよ」

ミアスは朝の時のようにアガトの手を引っ張り人通りの多い道を通ると駆け抜けていった。

「おじさーん。頼んでたものは来た〜？」
「おー、ミアスちゃん。届いてるよー」

フリマタ有数の魔導具店アーティファクトに入ると、店の店主にミアスは親しそうに話しかけた。

「やった。」

「何か頼んだのか？」

ミアスのような魔法を基本に戦闘をする者は魔法の速射のための媒体であるアーティファクトをよく使う。だからこそ、明日の龍狩りの為に取り寄せていたアーティファクトを取りに来ただろうか。それにしてはずいぶんとミアスが嬉しそうな顔をしている、とアガトは、いぶかしんだ。

「うん。まあ、そんなに気にしなくていいよ。ねえ、アガト。アガトは銀と金のどっちが好き？」

「ん？何だ、突然？」

「いいからっ」

「む・・・まあ、どっちかと言われれば銀・・・かな？」

「うん、分かったっ」

ミアスは嬉しそうに笑うと店の店主に愛想を振りまきながら礼をいい、二人で店を出た。

「アガト、明日は大きな戦いだね。」

「・・・ああ」

今までの浮かれた気分を一息に払い、ミアスはぼそりと言った。
アガトもその雰囲気を感じ、応える。

「……今まで何度も死線を潜り抜けてきたけど……いつになっても怖いものは怖いね？」

怯えたように言いながらもミアスは嬉しそうにこちらを見た。

ミアスにとって、それを感じられるようになったのは、とても嬉しいのだ。

「確かに。だが、俺はそんなものには負けてられない。」

「……目的のため？」

「……ああ」

ミアスにはアガトがひたすらに戦い続け、決して小さくはないアトラスのフリマタ支店の格位が1番になったにもかかわらず、いまだに誰よりも戦い続けている理由を教えていない。

正直には、只の個人的な理由のためにしているだけ。だが、ミアスがそれを知って今のように接してくれるか……それを知るのが怖く、アガトは教えない。

「うん、どんな理由かは知らないけど、明日も生き残ろうね。生き残って、その目的を果たしてよ。それが、私の恩返しでもあるんだから」

「……」

「んじゃ、あたし帰るね。じゃーねえー」

パタパタと青色の尻尾を振り回しながら、ミアスは人ごみの中を走っていき、やがて見えなくなった。

『……恩返し、ね』

「……」

『まあ、いいんじゃないか？別に知ってもミアスを救ったことは関係ないんだから』

「違うさ。俺がいたせいで、ミアスは・・・」

『とりあえず、家に帰ろう。明日のためにしっかりと休もう』

「ああ」

アガトは紅く染まり始めた空の下、家路へとついた。

「じゃあ、問題のオーガの巣に近い村、エルに送るから」

セクメトが床に展開された転移用の魔導式の前に立ち、手をかざす。

式の上には、仮面同様の黒い鎧を身に纏ったアガトとフード付きの白いローブを着たミアス、蒼い胸当てと腰当を軽く身に纏ったイルヴィアの完全武装した3人が立っていた。

まだ日が昇って間もないときに、ドラゴンが居るかもしれない村に行くのは危険と思われるが、相手は夜行性であるドラゴンだ。朝になったこのときならば、己がアースか略奪したオーガのアースに帰るだろう。移動時間もあるが、もし、帰っていなくても、確実に動作が緩慢に成り、かなり弱っている。それぞれが、全快のドラゴンを相手できる三人だ、そのような敵、苦勞せず倒せるだろう。

「・・・生きて帰って来いよ？」

そうセクメトが言い、足元の魔導式がセクメトの魔力の色、明るい蒼に近い紫色に輝いた。

風が円形の式の周りで激しく渦巻き、吹き抜けていく。激しい風に周りが見えなくなり、セクメトの姿が視界から消える。

「これから三時間かあ」

「速度重視のセクメトさんには珍しく、少々長いですね」

「ドラゴンは魔物の中でも上位種で、中には魔法を使う奴も居るらしいからな。透視防止に読心防止、果ては結界までこの式に組み込まれてる。その分遅くなったってことだと思っ」

アガトが地面に展開されている魔導式に触れてイルヴィアの質問に答える。

「へー。アガトさんも魔法が読めるんですね」

「まあ、ね」

魔導式に触れることでその効果を読むリーディング式読。それが出来るのは、魔法が使えるものの中でも上位に居る者と神職の者だけだ。ミアスもその中で高位に値する魔剣騎士なので使える。

「アガトさんは剣基本の刃撃滅者エッジ・エクスキューターでしょう？なんで普通の撃滅者にならなかったのですか？」

刃撃滅者。それはセクメトの大斧騎士ともミアスの魔剣騎士マジックナイトともイルヴィアの短剣騎士とも一線を引く特別な称号。

ただ、己が正義を守るためにどんな殺しでもする、断罪者。

その多くは、霸道の途中にある自分の正義への不信により身を滅ぼし、死ぬ。

ほとんどの者は、死亡率の高すぎるその名を頂こうなどとは思わないが、アガトは違った。むしろ進んで成った。己が目的を達するために。その撃滅者にも、種類が二つある。

一つが、魔法を基本に戦う魔法型撃滅者、もう一つが剣を基本に

戦う剣技型撃滅者。どちらが上かと聞かれれば、意外な事だが、剣技型の撃滅者だ。

まず、これには撃滅者になる資格についてから説明しなければならぬだろう。

撃滅者になるには、政府の用意する最強のモノと戦う。このときのモノとは、人も魔物も指す。それと相打ち、勝つことで撃滅者となる資格を持つ。これにより、既に減っていた撃滅者に成ろうと思ふ者は、さらにふるいを掛けられる。

剣技型、魔法型の分けられ方は、このときの戦闘法に起因する。魔法を一度でも使ったのなら、魔法型。魔法を使わず、剣のみで勝った者が剣技型となる。

格段に、このときに魔法を使ったほうが楽だ。相手にはそんな規制は無く、魔法が使い放題。剣技型にならないと決めれば、その難易度は数段下がる。それゆえ、剣技型の方が、魔法型よりも格が上とされるのだ。

だが、生き残ろうとするのなら、魔法型の方が何割か上だ。

なぜならば、剣技型撃滅者には、ギルドより死線ギリギリの依頼が何時も義務とでも言うかのように舞い込んでくるからだ。

だが、アガトはそれになった。

死線を何度も越えかけたこともあった。だが、アガトは目的のために死ねない。その確固たる決意と悪魔憑きという呪いの様な後天的な力により今に至っても、アガトは死んでいない。

アガトの正義、それを思うと必ず思い出される記憶。

「……貴方は、周りに悪魔といわれているのね」

彼女に一番知られなくなかった事を知られてしまった。

かつて一人で泣いていた子供はそう思った。

だから、子供は彼女に自分を嫌うかと聞いた。

「？ そんなことするわけ無いでしょう？」

訳が分からない、という顔でこちらを見る彼女に何故かと

子供は聞いた。

「悪魔に憑かれていたのを本当としても、貴方がその力を悪魔のように振るう訳ではないでしょう？」

今はしない。けど、今後は分らないと子供は答えた。

「なら、私が思う正義を教えてあげる。まだ幼い私程度の正義だけだね」

アガトは彼女に正義を教えられた。だから、アガトは自分の正義を疑うことなどせず、ただ目的のために突き進めばいいだけになった。自分だけのものではないと分かると、どれ程人がそれを信じることが出来るか、彼女は知っていたのだろう。だから、アガトは自分の正義に不信を抱かずにもう5年も剣型撃滅者、刃撃滅者を続けていられる。

『アガト』

アゼルの声が、飛んでいたアガトの意識を呼び戻す。

アゼルも、なぜアガトが刃撃滅者をしていられるのか、知っているはずだ。

アゼルもあの時、共にいたのだから

「なんで、か・・・うーん、特に理由は無いんだ」

「それじゃあ、割に合わないでしょう？」

「別に？まあ、有るとすれば、この剣で目的を達するためには強くなくちゃいけない。中央に籠っている貴族から依頼がくる位まで」

「貴族から？」

「あー、特に意味は無いから聞き流してくれ」

「？」

数時間後

雪に覆われた高い建物が連なっている町、エルの広場で一部の空間が切り開かれるように開き、その中からアガト、ミアス、イルヴィアが出てくる。

「ふわぁ、着いたねー！」

「一面、白いな。雪か？」

「この季節に雪ですか・・・」

ミアスは狭い空間から解放されたのが嬉しいのか転げまわるが、アガトとイルヴィアは、今の季節は春である上にフリマタよりも南に有るはずの町の異様な風景に眉をひそめる。

「・・・ドラゴン龍の息吹フレス・・・だろぅな」

「多分そうでしょう。白龍ホワイト・フレスの雪原の息吹以外にこの時期に雪が積もるのは考え辛いですから」

「ああ。あと、緑龍もだな」

アガトたちが転移した背後では、舗装されていた石造りの道が龍の足跡のほかにも異様な壊れ方をしている部分がある。白龍は、吹雪のような氷と雪の猛攻の息吹“雪原の息吹”を吐き、緑龍は、その足で地面を踏み鳴らし、土を隆起させ、相手を貫く大地の大槍アース・ニードルや、地割れを起こす大地の怒りなどが特徴の龍族の種類だ。アース・クウエイク

「・・・基本的に緑龍と白龍は共生しないはずですよ。よっぽど珍しい巢をオーガはやってしまったのでしょうか？」

「・・・それも有るが、人の手による可能性も有る」

「・・・ここで仮説を立てていても始まりません。どこかにこの人は・・・」

そのときだった。

「ぎゃあああああああああああああああああ……」

「あああああああああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

！……！

「」「」「」

悲鳴と怒声と龍の咆哮が辺りに響き渡った。

「あつち！」

ヒト族には無い聴力を駆使し、ミアスは方向を割り出すとアガトたちを連れ、走り出した。

「急ぐぞ！」

「ギヤアアアアアアアアアア……」

「クツ」

悲鳴を聞きながら、アガトたちはそれぞれ剣を構え走った。

「ちつ！予想通りかよ！」

「ええ、全くセクメトさんの言う通り！最悪な依頼ですね！」

町の人々だろうか、十数人のヒト族や獣人達を、体長20mは有るかという白龍と緑龍が襲っていた。

「ああああ！」

アガトは今まで以上の加速を見せ、白龍の大きい懐へともぐりこむ。

背おっていたそれぞれが巨大な白銀と鐵のバスタードソードを一息に抜き放ち、剣戟を放った。

奔る二本の冷たい光を放つ軌道。

白銀も鐵も風を切りながら、鱗へとへと一閃される。そして、ぶつかるのは、硬い鐵と白銀と鱗。

一瞬、火花が散り、あたりを照らす。

だが、拮抗は一瞬。

鱗は鐵と白銀に対し、もろく砕かれ、白龍のその美しいまでに白い鱗で覆われた腹に二本の傷跡が刻まれる。

砕かれた鱗が地面に落ちる。すると、まるで鉄が硬い地面に落ちたような高い音が辺りに響いた。

それほどの硬度をもった鱗さえをも、アガトの鐵と白銀の剣は一閃で砕いたのだ。

傷口から鮮血があふれ出し、アガトを僅かに染める。

!!!!!!!!!!!!

人の声帯では不可能な大地を震わすような悲鳴を上げ、白龍は足元にいるアガトを踏み潰そうともがく。だが、それを避け、間髪いれずに、次々と白銀と鐵のバスタードソードで次々と白龍に傷をつけていく。

『ドラゴンにしては闇雲過ぎる攻撃だな』

「ああ、いくら朝で弱ってるだろうとはいえ、魔獣中最強種の龍ドラゴン族だ、こんな攻撃はおかしい」

アゼルがいぶかしむのにアガトも賛成する。

アガトはドラゴンの脚の間合いから離れ、懐に潜り込む。

足元にアガトが居るなら、自分には効かないホワイトブレスを吐いて追い払えばよいのだが、白龍はそれをせず、お粗末にも踏み潰そうとする。

『おかしな敵、だが、』

『今はそんな事は考えずに、殺す！』』

アガトは、背後で揺らめくアゼルと声を合わせると共に白銀と鐵の剣を握りなおし、白龍へともう一度駆けた。

一方、イルヴィアは腰からマインゴーシュを抜き、緑龍の顔めがけ緑龍の足を駆け上る。ほぼ垂直であるにもかかわらず、イルヴィアは、その足を上りきる。

緑龍も自分の背に相手がいるので、攻撃が出来ない。

身体を揺らし、イルヴィアを振り落とそうとするが、イルヴィアは問題なく緑龍の背中にマインゴーシュを突き立てる。

硬質なモノ同士がぶつかり合う音が響き、光が灯るように火花が散る。

イルヴィアのマインゴーシュは、緑龍のエメラルドのような輝きを持つ硬質な鱗によって、砕き中身を切り裂くことが出来ず、弾かれてしまった。

「むっ。ならっ」

イルヴィアは、弾かれ、崩れた体勢を素早く立て直し所々に突起の有る緑龍の背中である悪路を物ともせず走る。

その素早い動きは、獣の様に素早く他の龍がイルヴィアを止めようとするが、軽く避ける。

緑龍の顔まで辿り着くと、何時もの天使のような微笑みを浮かべて言った。

「フフツ。鱗は硬くても、目は流石に守れないでしょう?」

残像が残るほどの速さで緑龍の右の瞳にマインゴーシュを突き立てた。

ブシュツと熟れ切った蜜柑みかんを潰す様な音がして、緑龍の瞳からおびただしい量の血が吹き出た。

!

緑龍は、隣にいる白龍に体当たりでもするかのような勢いで身体を揺すって痛みを耐えようとする。

「イルヴィアさん!下がって!」

「はい!」

向かいの建物の上に立っているミアスに言われ、イルヴィアは、6 mは有るかという距離を跳び、龍の背から建物に飛び移る。

「アガトとイルヴィアさんばつかにかまけてると・・・殺すよ?

焼き尽くせ!業火の刃!炸裂する火炎刃!バーン・エッジ」

ミアスの美しい装飾のされたレイピア細剣の先から刃型の灼熱の火焰弾が、十個分、魔導式と共に空中に展開され、白龍と緑龍めがけて放たれる。ミアスの握るこのレイピアも、魔導具アーティファクトの一つである。これに刻まれた能力は、火炎系魔法の魔導補助。それにより、ミアスは短時間で火炎系高等魔法”炸裂する火炎刃”を使役できたのだ。火焰弾は、綺麗な赤い線を描きながら空中を疾駆し、五つづつ緑龍と白龍へとぶつかり、炸裂する。横からの突如な魔法攻撃に、二匹とも体勢を崩す。

「よしっ。全弾命中ーっ」

だが、その爆発によって起こった火の粉は、白龍の下に居たアガトにまで降りかかる。

「おわっ！？あつぶねっ！ミアスっ、撃つ時にはこっちにもちゃんと言え！」

「あ、ごめん！」

『さっさとこれくらい終わらせればいいんだよ』

「ちっ。わかったよ」

「百花流 一ノ花 血花！」

白龍がミアスの攻撃で隙を見せた一瞬で、アガトは両方の剣を交差させて構えると白龍の右前足の付け根を狙い、両方を左右に回転させるように振り抜く。その振り抜いた力を無駄にすることなく方向を変え、もう一度一閃する。

四本の黒と白の剣の軌道が互いに交差し合い、白龍の硬い鱗をも破壊し、脚に深い傷をつける。その傷口から鮮血があふれ出し、その傷は真つ赤な四つの花弁を持つ花のようになり、その傷が深いくないことを物語る。

切られた白龍は、足を一本使えなくされ、その方向に倒れこんでしまっ。

白龍が地面に倒れこむと同時にアガトはその隙を逃さず、倒れこんだ白龍の首まで走る。

「情けは、かけないぞ」

「百花流 五ノ花 彼岸斬頭」

二本の剣の刃を一つに重ね、右の黒い剣で、白龍の首を刎ねる。

其処にあつたはずの、ダイヤモンドに似た鱗も全て粉々に叩き割り、それが零れる雪の結晶のように、辺りに流れていく。

ゴトンツという重い音がし、頭の無くなった首の傷口から、彼岸花のように血が噴出した。

「……………」

それを無言で眺めた一瞬だった。

『あ』

「ぐうっ！」

アガトは額を押さえ、地面に倒れた。痣あざが凄まじい痛みを発しながら疼いたいたのだ。

「ううううっ」

『くっは……………』

「ぐろぐろと身体を転がしながら、アガトは痛みを耐える。

悪魔憑きは体を悪魔に侵食される者。アガトも一見大丈夫そうだが、侵食されていない訳では無いのだ。

「ぐうっ……………ふう」

『はあっはあっ』

ようやく痛みが引き、アガトは立ち上がった。

「……………大丈夫か？」

『……………』

アゼルは無言の肯定をした。彼女もアガトの身体も喰らいたいと

いう訳ではないらしく、疼くと痛みを抑えようと必死になる。

アゼルの安否を確認するとアガトは、緑龍と戦っている二人の下へ走った。

「はあ！」

！

緑龍は白龍を殺されたからだろうか、潰されていない左の濁っている緑の瞳で憎しみの籠った視線を此方に投げかける。

「イルヴィアさん」

「何でしょうかつ」

二人とも、緑龍の繰り出す、アースニードルや、アースクウェイクを避けたり、切り裂いたりしながら言う。

「あいつ、おかしくないですか？」

「・・・確かにそうですね。普通の龍なら、もう少し頭を使ってもいいのではないだろうか」

先ほどの白龍もそうだった。どうやら、イルヴィアもアガトやアゼルと同意見のようだ。

「・・・誰かに知性を奪われてるのかもしれませんが」

「ミアス、あいつに何か魔法はかかっているか？」

「ん、ちょっと待って。確認してみる」

アガトは、遠くで連続して魔導式を展開し、イルヴィアやアガトの補助をしているミアスに聞く。

ミアスは、応えると目を閉じゆっくりと開く。その瞳には小さな

魔導式が展開されている。式読の一つの形、視覚で取り入れた魔導式の効果を読み取る、視読だ。

「……かかっている。操作系の魔法」

「……やっぱりか」

その言葉にアガトは一瞬、憎しげに顔をしかめる。ドラゴン族は魔法に対する防御力が強い。だからこそ、普通の人間に撃ったら一瞬で焼き尽くしてしまうバーン・エッジを体勢を崩すだけで済んだのだ。

だが、そのドラゴンが成功率の低い操作系の魔法にかかっている。そんな事が出来るモノにアガトは一つだけ心当たりがあった。

「何か解除の方法はないか？」

「だめ、アガト。もうこの人は助からない」

「？」

「そういう魔法もかかっている。時間がたったら、身体が朽ちてい

く

確かに良く見ると、足の先のほうから緑龍だからではない土の色が広がっている。

このまま広がれば、全身が土の色になり砂のように朽ちるだろう。

「……」

「アガト……」

「イルヴィアさん。一撃で殺そう」

「……わかりました。あわせて、一撃で叩き潰しましょう」

「行きますよっ」

「はいっ！」

アガトとイルヴィアは緑龍の尻尾を思いつきり振るといふ大振りな攻撃を飛び上がって避ける。そのまま緑龍の頭へとめがけて、アガトは二本の剣を振り下ろし緑龍の頭の鱗を砕いた。

！

頭の鱗を砕かれ、隻眼の緑龍は苦痛に悶える。

イルヴィアはそのアガトのつけた傷にマインゴーシュを突き立てた。

ブシュツとおびただしい量の血が雨のように辺り一面に降り注ぐ。

!!!!!!!!!!!!!!

緑龍の甲高い悲鳴が響き渡り、やがて聞こえなくなった。頭を潰され、緑龍は絶命しゆっくりと身体が倒れていく。その数秒後、大きな地鳴りのような音がした。

第四章 龍族討伐依頼 開始（後書き）

宵月の書くスピードが遅いため、更新は一週間ごとになりました^^
よろしくですw

えと、今回は戦闘が入ったので長めになりました。

やっぱり戦闘はいいですっw書くのが楽しくなりますw
w
しばらくはこの龍討伐依頼が続くので、よろろです^^

第五章 悪夢の前の出会い

「ふうっ」

緑龍の体が倒れ、絶命したことを確認するとアガトは息を吐き、脱力する

「大丈夫ですか？」

イルヴィアは、襲われていた町の人に声を掛けた。

「あ、あんたらは？」

その中の一人の中年の男が恐る恐る言う。

「《アトラス》の者です。私はイルヴィア、あの綺麗なこ娘がミス。そしてこっちの無愛想な子はアガトと申します」

「ギルドの人か！助かった！儂は、この町の町長なんだが、あの糞ドラゴンどもに儂の町がボロボロにされてしまった！」

「おっさん」

「はい？」

アガトがぶっきらぼうに町長に聞く。

「怪我人はどうした。町を気遣うより先にそっちを優先して気遣うべきじゃないのか？」

「そ、そんな。ちゃんと心配しておりますよ……」

「けど、怪我人の治療を求めるよりも先に町がどうのこうのいったよな」

「ぐ……」

何も言い返せない町長にミアスが助け舟を出した。

「アガト、そんなに苛めないの！町長さん、私が怪我した人を治しますからこの二人にどういう事があったのか、細かく教えてください」

「はっはい。お願いします……」

ミアスの可愛さに年も考えずに見とれているのか、町長はミアスを見たままボーっとしていた。アガトは何故か分からないがイラッとした。

「フフツ面白くなさそうな顔ですね？」

「別に、もし苛立ってるにしてもあの町長の町の人よりも町を心配したのが苛立ちます」

「フフツ本当ですかあ？」

「……どうだって良いでしょ。おっさん、さっさと話せ」

「はっはい」

町長はいそいでこちらに向き直ると、事の起こりを話し始めた。

始まりは一週間ほど前、深夜に起きた突然の龍の襲来だった。

突然襲来した赤に白に緑の龍達

赤龍は町に向かって業火ファイア・ブレスの息吹を吐き、白龍は雪原ホワイト・ブレスの息吹を吐き、

緑龍が大地アース・クウエイクの怒りで地面を割るなど、突然の猛攻に人々は逃げ惑った。町に多大な被害をもたらせた龍たちだが、何故か朝になると砂のようになくなって消えてしまったらしい。

それから何度も襲来があり、その度に被害がでる。しかも、どん

どんとこの町に居る時間は長くなり、今日ついに昼まで居るようになってしまったそうだ。

元は500人ほどいたが既に町長を含め、残ったのはもう200人ほどだけだになってしまったらしい。

もうこのまま殺されるのかと思っただころにアガトたちが来たそう
うだ。

「ふうん。ここに居るのは生活に必要な物を取りに来た者だけで、
他は別のところで避難している」と

「はい・・・」

「そっちの避難場所は安全なのか？」

「多分。ドラゴンは入れない程入り口の小さい洞窟で、グネグネ
と曲がっている上に出口は何箇所もあります」

「それは、なかなかいい避難場所ですね」

「使われることなど無かった方が良かったんですけど・・・」

町長が苦笑して言う。

「まあ、避難場所があるなら、治療が終わったらさっさと其処に
行け。後は俺たちがなんとかする」

「分かりました」

いまいち納得できていなそうな顔を町長はしていたが、此方は戦
闘専門のギルドの人間だ。しぶしぶ折れたのだろう。

「ミアス、どうだ？」

「うん。この子で最後だよ」

アガトたちが龍達の死骸を弔った後、ミアスの所に行くと、ミア

スは小さな女の子の膝小僧を治療していた。

転んだのだろっ軽い擦り傷だったが、ミアスは腰に有る大きめのポシエットから緑の液体で満たされた小ぶりの瓶とガーゼを取り出すと、ガーゼに瓶の中の緑の液体を染み込ませ、女の子の膝に貼り付けた。

すると、女の子は礼を言ってから走って何処かへ行ってしまった。

「ポーション治療薬が要る傷じゃないだろ？」

その程度の怪我、放っておいても治るのに二週間はかからないだろうが、ミアスが結構値が張るポーションを浸ける事にアガトは気になった。

「女の子の傷跡は一生物だからね、跡が残らないようにしないと」「ふうん？」

「全く、アガトみたいな鈍感男は女の子のデリケートなところがわかんないんだろねー、イルヴィアさん」

「ええ、そんな質問をする時点で既に問題外ですね」

「む、一様そっいうのは習った。【女の子は男の子よりもデリケートだから大切にしない】【女の子を手荒に扱うことは許さない】

【泣かせたら私が怒る】とか・・・っ」

「？ 誰に??」

うつかり口を滑らせてしまった事にアガトは気付き、急いで口を閉じるがしっかりとミアスとイルヴィアが聞いてしまった後だった。

「い、いや。ただ昔知り合った人から教えてもらっただけで・・・」

「ほおー？アガトが、直ぐに他人と何かを教えあうくらい仲良く成ると思えないから、そのひと女の人とずいぶん長く一緒にいた

んだねえー?」

「うっ」

「・・・意外と浅慮ですね、アガトさん」

「ミ、ミアス、俺はあの人と五年くらい一緒に居ただけだぞ!？」

「五年!? そんなに長く一緒にいたっていうの!？」

ミアスが、レイピアを取り出し、空中に魔導式を展開させる。

「うわっ! ちょ、おま! 待てっ! 俺があの人と五年間一緒に居た事なんかお前が怒ることじゃないだろ!?! いや、それよりも! こんなところで、人相手に火焰系上級魔法を撃とうとするなあ!」

アガトが急ぎすぎたのか火に油を注ぐことを言い、それで何か切れたミアスは、暗い笑いをしだし、レイピアを振り上げ火焰弾まで召喚し始めた。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ! 浮気者のアガトならダイジョーブだよ! 焼き尽くせ! 業火の刃! 炸裂する^{バーン・エツ}火炎刃!」

「浮気って何のことだっというか、ぎゃー!」

「あらあら、ミアスさんたら、あつ篤いアプローチですね」

「イルヴィアさんっこれ、篤いとかじゃなくて、実際に熱いから! あっつ! 今、かすつたぞ! じよ、冗談じゃねえ! おわわわっ!」

『ど、どんどん来てるよ! 逃げて!』

「言われなくても逃げるわ!」

アガトとアゼルは飛んでくる火焰弾から必死に逃げ、それを微笑んでみているイルヴィアや次弾を召喚し始めたミアス達を見て、避難所を持って行く荷物をまとめていた町の人たちは、なんだかよく

分からないやつらだなあ・・・と思いながら笑っていた。

「・・・たく。ミアスめ、手加減しろよな」

アガトは、町から少し離れた岩の陰でミアスに焼かれた部分の確認をしていた。

流石に何発もくらうほど弱くはないので大した火傷は無い。だが、何故かミアスは、以上にしつこく、既に町の人間たちは避難場所に行っただというのにまだ追っかけていた。

「もう夕方だぞ・・・」

既に南の空は、紅く染まり終え、暗くなり始めている。

『アガトも悪い、うっかりあのことを喋って、さらに火に油を注ぐこと言ったなんて。全く、イルヴィアやミアスの言う通り女心分からない奴だよ』

「む、お前は分かるのかよ」

『当たり前。このアゼルなんだと思ってる』

「知らねえ。正直どうでもいいし。さあてっと、そろそろ戻るか」

アガトが腰を上げたときだった。

「キヤッ」

「ん？」

アガトの隠れた岩の向こうで、女の子の小さな悲鳴が聞こえ、何かが倒れるような音と硬質なもの同士がぶつかるような音がした。

覗いてみると、ミアスよりも少し小さいだろうか、十四、五歳の

少女が倒れていた。

「おい、大丈夫か？」

「う……あう……」

声を掛けると起き上がったが、それなりに痛かったらしく顔を擦るようにして痛みを耐えている。怪我をしたのか、その手には僅かな血がついていた。

「おい、ちよつと見せてみる」

「ふえ……」

ミアスやイルヴィアの言葉とあの人の言葉を思い出し、アガトは少女の手を取り、顔に目をやった。

「……デコ、切ってる。そんな手で擦ったらう膿むぞ？」

「あうう、傷薬……もってません」

「俺のやるよ」

「え」

「それ、早くしないと傷跡残りそうだし」

傷自体は小さいものだが、これは自然に治すと跡が残る、と直感でアガトは感じた。

少女は、東方の血が混ざっているのか、白に肌色を混ぜたような肌の色をし、長く艶やかな黒髪を後ろに束ねていた。目は大きく、そのくくどう黒瞳は迷い無く澄み切っている。

これは間違いなくミアス級の美少女だな、と思いながら、アガトは太ももにある隠しポケットからミアスの持っていたものよりさらに小ぶりな応急処置用のポーション治療薬を取り出す。

自分からしてやると言っているのに応急処置用か、と思われるだ

るうが、アガトはこれ以外のポーションを必要としないため、これ以上のものを持っていないので仕方ない。

「冷たいけど我慢しろよ」

「・・・はい」

気の弱いこ娘なのか少女の声は小さい。アガトは、少女の額にポーションに浸した布をそつと被せる。少しひぐつと少女は言ったが、多分冷たさに驚いたのだろう

「ほれ、これを数時間つけとけば大丈夫だ。それにしても・・・」

横目で少女がこけた場所を見る。そこには、鋭く尖った石が一つ落ちていた。多分これで切つたのだろうが・・・それにしても傷が小さい・・・

「運が良かったんだろうな。良かったな」

「・・・はい、ありがとうございます・・・」

「別に俺がしたかったただだから。職業柄、自分の正義は曲げられないんでな」

「??」

「あー。いや、なんでもない」

少女はアガトを見てポカンとしていた。

「まあ、とりあえずもうコケて怪我するなよ?」

「はい・・・」

「ああ、後、もうエルの奴らは避難場所に行ったぞ?お前もさっさと行けよ?」

アガトが、そのまま立ち去ろうとすると、今まで小声だった少女が言った。

「あのっ、お名前は？」

「・・・アガト・フローズヴィトニル、じゃあな」

「わ、わたしは、氷華って言います！」

アガトは名前からやっぱり東方系の血が入ってるんだな、と思いながら、振り返らずにただ手を振り、少女に別れを告げた。

「アガト！何処に行ってたの！」

今日泊まる事になった空き家に行くと、ミアスが怒ってでてきた。

「お前に追いかけられたから逃げてたんだよ！」

「それにしても、少し遅くはありませんか？もう直ぐ町長から教えていただいたドラゴンが来る時間ですよ？」

中で静かに紅茶を飲んでいたイルヴィアが言う。

「・・・すみませんでした」

「もー、じゃあ作戦を確認するよ？」

「おう」

三人とも部屋の中央に置かれた机につく。

「作戦というよりもう行動確認だね。」

町長から聞くと、日が沈んだ少し後に龍が絶対来るらしいから、
1、この町に来たドラゴンを一匹以外全て無力化、または殺す

- 2、残った一匹に巣まで案内させる
- 3、その中にいる【王】を捕縛する
の三つだね

「王、ねえ」

「ドラゴンの特徴的な習性といっても何か非効率な気がしてまりませんね」

龍族は、住むに住むとき、住む龍たちの長を用意する。

その長には、人化が出来るという条件がある。

人化、それは特定の魔物たちしか出来ない人に擬態する魔法で、行使中は多大な魔力を要するため、できる個体は少ないといわれている。

龍族もその特定の魔物の中の一部である。

人化されると、よっぽど強く視読リーディングをするしか見分ける方法がないので、昔から出来る種には手を焼いてきた。だが、人化すると元の力は解くまで使えず、龍なら皮膚が硬くなる程度にまで下がってしまう。それなのに、人化するというのはなぜなのか、人族の中に潜入する以外の目的は分かかっていない。

ここで話を戻すが、龍たちはそれを長にする習性を持ち、それを殺される、又は捕縛されるとその王に従う龍達は大人しくなる、という習性があるのだ。

「操作系の魔法がかけられてるって心配は有るけど・・・この方法しかないしね」

「多分、大丈夫だろ。巣には何十匹も龍がいるんだ。流石にそれ全部はかけられないだろ」

「あ、うん。そうだね」

「まあ、一樣、警戒はしとくよ。戦闘は昼と同じ、イルヴィアさんとミアスが二人で、俺が単独で、出来れば二人の助けに入る」

「うん、わかった」

「わかりました」

「じゃあ、二人とも。セクメトさんの約束を守るためにも生きて帰ろう」

アガトは単独行動のため、一人きたばかりのねぐらを出て行く。

「うん、また後でね」

「わかってる」

アガトは、振り返らずに出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3002/>

アルモニア国物語

2010年10月15日10時48分発行